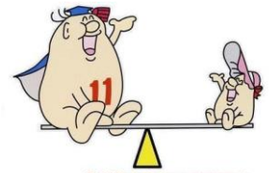
HAKUHO.J.H 人権だより Vol.4

絆 ～きずな～





2026. 9. 24(木)発行

文責　古渕文章

AI(人工知能)も人権を尊重します



AI(Artificial Intelligence ｱｰﾃｨﾌｨｼｬﾙ･ｲﾝﾃﾃｨｼﾞｪﾝｽ　人工知能)の普及はめざましく、わたしたちの日常に深く入り込んでいます。ちょっとした調べごと、判断の材料として、チャットGTP、グロック、ディープシークなど、数多くのAIを活用しています。

そのAIですが、「AI倫理の５原則」というものがあり、AIを開発する上で、守らなければならない５つの約束があります。５つすべてをあげるのは、紙面の分量上さけますが、その**第１原則は「人間中心性・人権尊重」**と定めています。

くわしくいえば、**AIは人間の尊厳(そんげん　注：人間はかけがえのない存在であり、勝手に傷つけてはいけない、ということ)・人権・多様性を守り、人間を補う形で使うべきである**、という意味になります。**国際連合のユネスコ(教育、科学、文化を通じて平和の発展を目指す機関)は、人権(人が幸せに生きる権利)をAI管理の中心と位置づけています。**

AIは機械で感情を持たない存在ですが、人権を守る姿勢を明確にしています。AIに「人を傷つける文章を考えて」と頼んでも、「そのお願いには協力できません。」と協力を拒否します。AIは、人を傷つけてはいけない、ということをよく分かっています。一方の人間はどうでしょうか？　平気で暴言を吐き、匿名性(とくめいせい　注：自分がだれかを分からないようにすること)をいいことにSNSに見るにたえない書き込みをしている人がたくさんいます。

AIはいずれ、人間を超えるだろうといわれています。この超えるというのは、AIは思考力、判断力、直感力をさらに進化させ、人間を超える、と思われがちですが、実はここに人権の尊重もふくまれています。誰に何を言われようが、人が幸せに生きる権利を尊重する。AIはこの姿勢を土台としています。ゆらぐことはありません。

わたしたちは、計算能力ではAIに負けても、モラルでAIに負けたくはないですね。

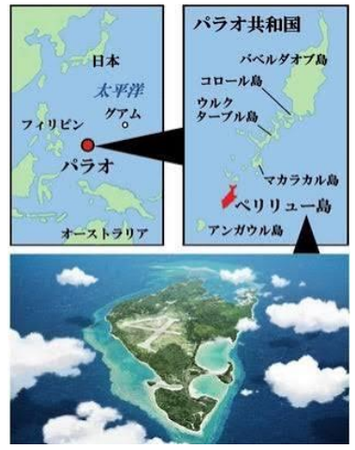
人権(人が幸せに生きる権利)は守らなければならない。AIの発達は、この当たり前のことに警告を発しているのではないでしょうか。

映画「ペリリュー　楽園のゲルニカ」原作本が、図書室に入る予定です

８月２８日(金)の平和学習で、戦争アニメ映画「ペリリュー　楽園のゲルニカ」を視聴しました。視聴後、「戦争はむごいと思った」「日本兵どうしすら、銃を向け合うのは、ざんこくだった」など、心にひびいた感想が多くありました。

映画「ペリリュー　楽園のゲルニカ」は全１１巻のマンガが原作です。この原作マンガ、１１月半ば以降に本校の図書室に入る予定です。このお知らせを知って、心待ちにする人も多いでしょう。図書室の本ですので、貸し出しは可となります。借りる人は貸出期限を厳守(げんしゅ)し、汚れや折り目がつかないよう、本を大切に扱ってください。





映画「ペリリュー　楽園のゲルニカ」裏話

「見て良かった。」「戦争のひさんさがよく分かった。」など、みなさんからの評価が高かったので、映画「ペリリュー　楽園のゲルニカ」の裏話を１つ。

あの映画に登場する日本兵たちは３４人。１人１人に声が与えられ、３４人の声優さんが声をあてています。この３４人という人数は、実際に太平洋戦争終結後、ペリリュー島で生き残った日本兵３４人と同数です(ペリリュー島守備隊は１万人ほどいましたが、生き残ったのは３４人だけでした。生存率０．００３４％です)。

実際の生き残り３４人と同数のキャラクター１人１人に声を与えたことは、この映画を作ったスタッフの強い思い入れを感じます。事実を元にした映画である以上、生き残った３４人にセリフを割り振り、生きているからこそ言葉を残せる！　死んだら何の言葉も残せない！　この悲劇を風化させない！　そんな強い思いを感じます。

みなさんは映画「ペリリュー　戦場のゲルニカ」のスタッフから、どんな思いを受け止めたでしょうか。